

甲状腺外科草子 165

独断のお気に入り映画7：ミリタリー映画

杉野 圭三

戦争を扱う映画は一般的に「戦争映画」と定義されることが多いが、史実に基づくものと、フィクション主体のもので区別が難しい。**軍事作戦**を扱ったお気に入りの「ミリタリー映画」を紹介する。



なお、アラビアのロレンス、戦場に架ける橋などの格調高い名作は除外した。

メンフィス・ベル (1990, マイケル・ケイトン＝ジョーンズ監督)

第二次世界大戦中、イギリスに駐留したアメリカ第8空軍はドイツに対する爆撃を25回達成した搭乗員はその功績により帰国できることとした。

「同名の1944年のドキュメンタリー映画」では監督のウィリアム・ワイラー自らが爆撃機に乗り込んで爆撃や空中戦シーンを撮影した。



1990年制作映画の主役は圧倒的存在感の「空飛ぶ要塞B17」である。若き搭乗員たちが苛酷な任務の間にフットボールに興じる姿は旧日本軍では想像できないアメリカらしい軍隊生活である。

世界中のパイロットにとって必見の映画とされ、劇中に流れる「ダニーボーイ」も抒情がある。

クリムゾン・タイド (1995, トニー・スコット監督)

弾道ミサイル原子力潜水艦の艦長と副長がミサイル発射命令の解釈を巡り対立する。



アクの強い艦長ラムジー大佐（ジーン・ハックマン）とエリート副長（デンゼル・ワシントン）の配役が絶妙である。

冒頭、大雨の中での原潜アラバマ出航シーンで艦長が傘をさし愛犬を連れて登場する場面は海軍関係者なら大笑いするだろう。艦内にペットを連れ込む

のも、傘をさすのも現実ではあり得ない話だ。

ミサイル発射命令を巡る艦長派と副長派の対立は反乱寸前となり、息もつかせぬスリリングな展開となる。アメリカ海軍では前任伍長（ジョージ・ズンザ）のほうが階級上位の士官より重要な役割を担っていることも印象的である。

ナヴァロンの要塞 (1961, J・リー・トンプソン監督)

アリスティア・マクリーン原作、エーゲ海の難攻不落のドイツ要塞を連合軍特殊部隊が破壊を試みる。



続編「ナヴァロンの嵐」の原作は好評だったが、映画版の評価は今一つだった。



隊長のグレゴリー・ベック、爆破係のデヴィッド・ニーヴン、ギリシア軍将校アンソニー・クインなどの豪華メンバーが映画の成功要因となった。

バルジ大作戦 (1965, ケン・アナキン監督)

第二次大戦末期のドイツ軍は起死回生の一手として戦車部隊を集結させ反攻作戦を計画した。



ヘンリー・フォンダが米陸軍情報士官、ドイツ軍指揮官ヘスラー大佐をロバート・ショウが演じた。チャールズ・ブロンソンも出演しているが影が薄い。撮影に使ったドイツ軍戦車は今一つだが、若い戦車兵らが士気の高さを鼓舞するために「パンツァー・リート」（戦車の歌）を合唱するシーンはこの映画のハイライトとなっている。



ロバート・ショウは「007 ロシアより愛をこめて」、「スティング」、「ジョーズ」などで強い印象を残した名優である。

参考資料：Wikipedia など

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2026年2月5日